

ニュージョナゴールド

登録番号：第63号

育成者：斎藤昌美

登録年月日：昭和55年8月13日

来歴：「ジョナゴールド」の枝変わり

登録者：株式会社 福島天香園(福島市荒井字上町裏2番地)

特性

■栽培特性

原品種の「ジョナゴールド」と同様、三倍体品種としての特徴をよく現わし、葉は大型でマルバカイドウ台使用樹では樹勢は極めて旺盛である。果実の大きさも三倍体の例にもれず500gを越すほどの大きさとなる。果実の着色は、着色系枝変わり品種としての特性上、原品種より明らかに優れているが、本質的には直光着色型であり、樹勢の落ち着かない枝の繁茂し過ぎている樹の下枝では着色が劣るので注意を要する。一方、わい性台木のM.26台とは接木親和性にやや欠け、大きな接ぎ目こぶを形成する。しかし、この接木不親和現象は実用的には障害とはなっておらず、むしろ、これに基づく樹勢抑制が糖度の増大、着色の増進につながり、やや強めの酸味と調和した高品質果実の生産を可能にしている。したがって、本品種の栽培においては、品種本来の特徴を十二分に発揮できるM.26台の利用が最も有効と考えられる。ただし、過剰着果による樹勢衰弱には特に留意すべきであり、植栽時における接木部の高さは15~20cmとするのが安全である。早期結実性を示し極めて豊産性である。「ふじ」、「つがる」、「王林」等の主要品種とは交雑和合性を示すが、本品種自体は三倍体品種として花粉稔性が劣るため相互受粉樹とすることは避けるべきである。収穫期は長野で10月上・中旬、育成地の青森では10月中・下旬となる。大玉果は日持ち性が劣るので、中玉生産に徹すべきである。

■果実特性

平均果重は300~350gとされるが、現地の樹勢の旺盛な樹では500gを越すことも稀ではない。しかし、果実の日持ち性、着色の点からは、中玉の300~350gとし、果点が浮き出るような肥培法をとることが大事である。M.26台使用樹で樹勢が適正であれば、この大きさで4~5tの生産は可能である。果形は円~長円。黄緑色の地に中~濃赤色縞状の着色を示す。着色歩合は原品種の「ジョナゴールド」より明らかに多く、外観美麗であるが、果実表面に蠟・脂質が出やすいのが欠点である。果肉は黄白色で硬く、緻密。果汁が多く、糖(屈折計示度)は14~15%、酸(滴定酸)は0.6~0.7%で味濃厚である。貯蔵性はやや高いが、冷蔵果の出荷も2月末までとするのが安全である。

■病虫害抵抗性

斑点落葉病には強いが、黒星病、赤星病、うどんこ病には罹病性である。

■地域適応性

適応範囲は比較的広く、りんご生産県においてそれぞれ品質の優れた果実の生産が可能とされている。しかし、日持ち性、着色の優れた果実の生産にはやや冷涼な気候が適する。「ジョナゴールド」は各県で補助品種、奨励品種、有望品種等の格付けがなされ増植が進められており、平成2年度の普及率は約4%となっている。このうち「ニュージョナゴールド」がどの程度の比率を占めるか明らかではないが、現在市販されている苗木の多くは本品種とみなされる。

(土屋七郎)